学習意欲を向上させる取り組み

ＩＬＥＣ言語教育文化研究所
植松　雅美

学習意欲の向上を図るには、身につけさせたい力を明確にした学習課題を設定することが核になる。その上で、子どもの発達に応じた学習方法、学習形態、学習材等の創意・工夫が求められる。

また、目標を定めて子どもが主体的に授業作りに参画することが意欲向上につながる。教師が学習条件を整え、子どもが学習主体として意思的に活動できるように授業を創り上げていきたい。以下、三事例をあげ具体的に述べる。

一　学習課題を焦点化する

椋鳩十の作品である「大造じいさんとガン」（大日本図書、一九六八年）の学習材では、ガンの頭領の残雪が仲間のガンを救うためにハヤブサと戦う場面が多くの子どもたちの感動を呼び起こす。ある授業での学習課題は「大造じいさんの心を大きく動かしたのはどの場面か」と設定された。

子どもが取り上げた場面は二箇所に集中した。一箇所は、大造じいさんにおとりとして飼われていたガンを守ろうとして残雪がハヤブサと戦う場面である。「大造じいさんは、ぐっと銃を肩にあてて残雪をねらいました。が、なんと思ったか、また銃をおろしてしまいました。」の叙述である。これまで、残雪を撃つために苦労し続けてきたじいさんが、ここで急に残雪を撃つことをあきらめてしまった心の変化をとらえたからである。

もう一箇所は、ハヤブサとの戦いに傷ついた残雪が、大造じいさんが近づいても「残雪はもうじたばたさわぎませんでした。さいごのときを感じて、せめて頭領としての威厳をきずつけまいと努力しているようでもありました。大造じいさんはつよく心をうたれ」を指摘した。ここでは、残雪という鳥に対して強い感動を覚えたからという理由からであった。本授業では、大造じいさんの心の変化に焦点を絞って子どもたちは考えを述べ合った。友だちの根拠に納得して自説を変えた子どももいたが、最後まで自説を変えずに自分の考えを発表する子どもも少なくなかった。焦点化された課題が明確なため、意欲が持続した授業であった。

二　体験を踏まえた学習を工夫する

小学校一年生での「上位語、下位語を学んで語彙を広げる授業」である。

子どもたちは授業に入る前に、生活科の時間を使って、魚屋、八百屋、お菓子屋などの店先にある品物を実際に見学し、いろいろな物の名前を収集した。教室に戻って「さかなや」「おかしや」などの上位語には「さんま」や「クッキー」などの下位語が含まれることを認識しながら類別して学習カードに記入した。その後、生活班のグループ毎に小黒板を使い、上位語と下位語を対比させ整理した。最後に各班別に学んだことを全体の中で発表し、意見を交流し合った。

語句・語彙の学習は一般的に机上の学習に終始し、学習意欲が高まらず学力が十分に定着しないことがある。本授業では、体験を通

し、生活に結びつけながら学習を展開したことで、活動の意欲が高まり、学力の定着も図られた。

三　達成感を味わわせる

「子ども区議会に提案する原稿を書く」ことを課題にした単元が設定された。「地域を点検し危険な箇所を見つけ災害に備える」ことをテーマに、班活動で情報を収集し、問題点を明らかにした。さらに詳しく情報を収集するために、学校図書館や公共図書館、インターネット、新聞、テレビなどから情報を集め、意見をまとめた。

学級全体で提案を交流するために、司会者と記録者を交代で分担し、話し合いを進行した。各班が地域毎の実態、課題、解決策を写真やデータを示しながら発表した。さらに全体で質問や意見を出し合い協議した。グループ単位で質問に答えたり補足説明を行ったりしたことや、全体協議で全員が発言し、話し合えたことは、子どもたちに達成感をもたらしたようである。その後、話し合いで深まった内容をさらに推敲し、全員が区議会への提案文を書き上げた。

ここでは、学習過程における、話す、聞く、読む、書くといった活動が主体的に行われたこと、また区議会への提案文を完成させたことが、学習意欲の向上につながったといえる。

四　終わりに

子どもが意欲的に学習するためには、それぞれの学習課題をもち、自らこれを調べたり考えたりしていく学び方を重視しなければならない。そのためには学校図書館の活用が欠かせない。課題を調べるために必要な図書情報を探し当て、読み調べて思考し、自分なりにまとめ、資料をつくり上げる学習活動に意義がある。受動的な学習から能動的な学習への転換である。学校図書館は、読み物を読むだけの施設ではない。主体的に学ぶために活用する学習センターである。子ども自ら学ぼうとする意欲を図書資料活用によってはぐくみたい。

「総合的な学習の時間」との関連で学校図書館を利用する例をあげる。国際理解教育の領域で「関心のある国と日本の文化の違い」という課題に取り組ませる。子どもたちは、「○○の国の子どもたちの遊び」といったような自分が関心のある課題を設定する。次に課題に即して情報を集める。集めた情報から必要な内容を選択し、要約する。これに自分の考えを入れて文章をつくり上げる。この学習活動は、子どもたちの主体性を生かしたものであり、意欲を持続させるはずである。

ここでは、情報収集力、情報選択力、要約力、表現力、そして伝え合う力などが身につくのである。

教師が、子どもの疑問やつまずきに目を向け、確かな学力をつけるためには、個々の子どもへの指導、支援が重要なポイントになることはいうまでもない。発達段階に応じた具体的な指導の工夫を期待する。

うえまつ　まさみ　東京都立教育研究所統括指導主事、公立小学校長などを経て、現在玉川大学講師、ＩＬＥＣ言語教育文化研究所常務理事。この間、全国公立小・中学校女性校長会会長、全日本図書館研究会会長を務める。主な編著書に『聞く力・話す力をはぐくむ国語科授業』『コミュニケーションの力をつける国語の授業』『読解力をはぐくむ授業の展開』（東洋館出版）などがある。